

修士論文(要旨)
2013年 7月

中学生が高齢者イメージを形成するプロセス
—高齢者施設への訪問経験の影響をもとに—

指導 白澤 政和 教授

老年学研究科
老年学専攻
211J6014
中村 正人

目次

I : 緒言	1
1 : 研究の背景.....	1
2 : 先行研究.....	5
3 : 研究の目的.....	6
II : 研究方法	7
1 : 調査対象者.....	7
2 : 調査の方法.....	7
3 : 倫理的配慮.....	8
4 : 分析方法.....	8
III : 結果	9
1 : ストーリーライン.....	9
2 : カテゴリー、概念の詳細.....	12
IV : 考察	28
1 : 高齢者に対するステレオタイプの存在.....	28
2 : 訪問経験が高齢者イメージに与えた影響.....	29
3 : 施設が中学生の訪問に対し果たすべき役割.....	30
4 : 学校、施設が協働する、経験を有効に活用する体験学習 (学校が介在する各種交流活動等) のあり方.....	30
5 : 本研究の限界と今後の課題.....	32
V : 結語	33

【謝 辞】

【引用文献】

資料

- <表 1> 世帯構造別、世帯類型別にみた世帯数及び平均世帯人員の年次推移
- <表 2> 世代構造別にみた児童のいる世帯数及び平均児童数の年次推移
- <表 3> 調査対象者の属性
- <表 4> インタビューガイド
- <図 1> 中学生の高齢者イメージ形成に施設訪問経験が影響するプロセスの概念図
分析ワークシート集

I. 緒言(研究の背景、研究の目的)

高齢者福祉施設ではボランティア、福祉体験、体験学習、世代間交流など、様々な教育段階・課程の幅広い年齢層の受け入れを行っている。しかし、時代の移り変わりによる家族構成や地域性の変化などで、学校での学習の機会がなければ、中学生でも80歳を超える高齢者と直に接したことがないといった状況が珍しくなくなっている現状もある。

本研究では中学生を対象に、幼少期からの高齢者イメージ生成プロセスはどういった情報から形成されるのか、更にそこに高齢者施設への訪問経験という実体験がどのように影響しそれがどういった変化をもたらすのか、といったプロセスの解明を目的とし、高齢者に対し偏見のない理解を印象付ける一助となる資料ともなりえることを期待した。

II. 研究方法

調査対象者を、「高齢者施設への訪問経験があり、本人および保護者から研究協力の同意が得られた中学生」とした。桜美林大学倫理委員会の承認(受付番号 12033)を得たうえで、中学校長から該当者の紹介を受け、その中学生本人およびその保護者にあてて、調査協力の依頼を書面にて行った。そして、同意を得られた9名に半構造化面接法にて面接調査を実施した。インタビュー内容の録音は、開始時に対象者の同意を最終確認し、同意を得たうえで後に逐語録化した。なお、調査対象者が未成年であることも加味し、調査対象者の不利益を回避している。

分析方法は Modified Grounded Theory Approach (M-GTA) を用いて行った。

III. 結果

9名分の逐語録から、27の概念を生成し、それらから6つのサブカテゴリー、5つのコアカテゴリーを生成した。分析の結果から、日々の中で【訪問経験前の漠然とした高齢者イメージ】を無意識に構築し、【漠然と形成されたイメージを変えるきっかけ】を得ることで【施設訪問経験によるイメージの修正】を経て、【高齢者のとらえ方の変化】をもたらすことが示された。しかし、老化という生物学的変化を中学生期においては自分の未来としてとらえることができない【変わらない気持ち】という側面も存在する、というストーリーラインの構成に至った。

IV. 考察

高齢者のイメージを調査した先行研究で明らかになっていた、高齢者に対するネガティブなステレオタイプの存在を確認することができた。そして、現代においてそのステレオタイプを形成しているのはマスメディアの影響が非常に大きいことから、その修正を行う学習は課題であるといえた。そして、施設への訪問の経験は、高齢者イメージに対してそれまでの漠然としたネガティブなものから、リアリティを伴ってポジティブな方向へイメージを変化させる作用があることが確認された。

これらのことから、施設と教育機関における協働の重要性が示唆されているが、双方にとって、現状では課題となることが山積している。

今回提示したグラウンデッド・セオリーも、応用者（ここでは教員や施設で対応する職員にあたる）によって実践の場で修正され、応用されることが求められる。そして、高齢者に対する理解は広義において、日本の高齢化社会を支えてゆく基盤となりえる思考の礎となる。更なる調査と分析によりこのグラウンデッド・セオリーが発展することを望む。

【主な引用文献】

- 1) 林もも子(2007)「愛着と養育のライフサイクルー思春期の子どもの自立と養育者・養育者のアタッチメントの視点からー」『こころの科学』134, 92-97.
- 2) 桑原洋子・水戸美津子・飯吉令枝(1997)「"老人観"に関する研究の問題」『新潟県立看護短期大学紀要』2, 49-51.
- 3) 奥村由美子・久世淳子(2008)「高齢者のイメージに関する文献研究ー一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージー」『日本福祉大学情報社会科学論集』11, 57-62.
- 4) 柴田博・芳賀博・古谷野亘・ほか(1985)『間違いだらけの老人像』川島書店.
- 5) 湯沢薙彦(1994)『小学生からみた祖父母との関係』長寿社会開発センター.
- 6) 中野いく子・冷水豊・中谷陽明・ほか(1994)「小学生と中学生の老人イメージSD法による測定と比較ー」『社会老年学』39, 11-22
- 7) 馬場純子・中野いく子・冷水豊・ほか(1993)「中学生の老人観ー老人観スケールによる測定ー」『社会老年学』38, 3-12.
- 8) 山本浩二・丹公雄(1995)「中学生の意識調査をとおして」『保健の科学』37/11, 746-753.
- 9) 湯沢薙彦(1994)『中学生からみた祖父母との関係』長寿社会開発センター.
- 10) 木下康仁(2007)『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法』弘文堂.
- 11) 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 道徳編 総合的な学習の時間編』.
- 12) 法務省・文部科学省(2012)『平成 24 年版 人権教育・啓発白書』.
- 13) 中野いく子(1991)「児童の老人イメージSD法による測定と要因分析ー」『社会老年学』34, 23-36.
- 14) 保坂久美子・袖井孝子(1988)「大学生の老人イメージSD法による要因分析ー」『社会老年学』27, 22-33.
- 15) 中谷陽明(2001)「児童の老人観ー老人観スケールによる測定と要因分析ー」『社会老年学』34, 13-22.
- 16) 小澤 温(2001)「施設コンフリクトと人権啓発」『部落解放研究』138, 2-11.
- 17) 堀薫夫・大谷英子(1995)「高齢者への偏見の世代間比較に関する調査研究」『大阪教育大学紀要第IV部門』44(1), 1-12.
- 18) 大谷栄子・松本光子(1995)「老人イメージと形成要因に関する調査研究(1)大学生の老人イメージと生活経験の関連」『日本看護研究学会雑誌』18(4), 25-38.
- 19) 前原なおみ・永浜明子(2010)「小学生の高齢者観の育成に関する現状報告」『大阪教育大学紀要第V部門』58(2), 91-101
- 20) 竹田恵子・太湯好子(2002)「中学生の老人イメージとその形成に関連する要因」『川崎医療福祉学会誌』12(1), 161-167.
- 21) 金田千賀子(2006)「子どもが抱く高齢者のイメージ」『医療福祉研究』2, 1-10.
- 22) 山本浩二・丹公雄(1995)「中学生の高齢化社会に対する意識および知識に関する調査研究」『研究紀要 / 東京学芸大学附属世田谷中学校』17, 13-23.
- 23) 藤原慶二(2009)「地域社会と社会福祉施設のあり方に関する一考察ー「施設の社会化」の展開と課題ー」『社会福祉学部研究紀要』12, 27-33.
- 24) 萩原滋ほか(2009)「日本のテレビCMにおける高齢者像の変遷ー1997年と2007年の比較ー」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』59, 113-129.